堀川 かくれ 産業・土木遺産

相反する要求に応えて 庄内用水頭首工

水分橋の隣にダムに似た施設がある。頭首工（とうしゅこう）だ。用水路に水を導入するため川の水位を堰（せ）き上げる施設である。
庄内用水や堀川がここで取水するようになったのは、明治10年の黒川開削からである。取水には川を横断する堰（せき）を設ける必要がある。だが堰は流れを妨害する施設でもあり、大雨の際には洪水の原因ともなる。ふだんは水位を堰き上げ、大雨の時には流れを妨害しないという二律背反の施設を造らなければならない。頭首工が出来るまでは毎年、庄内用水の取水時期になると庄内川を横断して木と石で堰を造っていた。大雨の時には堰は壊され、雨が上がればまた補修する。毎年こうしたことの繰り返しであった
戦争が激しくなり食糧危機が迫るなか、昭和19年に頭首工建設計画がたてられたが、当時の情勢では多大な経費と資材を必要とする大工事は実施できず、戦後の26年になりやっと着工ができた。
長さ185 m、高さ2 mの堰堤で、29年3月に完成した。1億2700万円という当時としては巨額の予算が投入されている。ちなみに、昭和32年の流行歌に「13800円」があり、これが一般的な庶民の所得であった。頭首工の完成により安定した取水ができ、大雨の時にはゲートを開放することで安全に放流するようになった。永年の懸案がやっと解決されたのである。

庄内用水頭首工取水口付近から八田川方面　左は水分橋

建　設　着工：昭和26年
　　竣工：昭和29年3月
規　模　長さ：185 m　堰上高：2 m

飢餓を防げ 瀬古の大井戸

堀川 かくれ 産業・土木遺産

食料増産のため掘られた瀬古の大井戸　給水パイプが川岸に設置されている

庄内用水元杁樋門のすぐ下流に、巨大な井戸がある。この井戸が掘られたのは昭和23年、食糧危機のさなかであった。
敗戦後の日本は大幅な食糧不足に陥っていた。さらに昭和22年は明治9年以来の大干ばつが追い討ちをかけた。庄内用水も大幅な水量不足になり、翌年から地下水による補給が3か所で行われることになった。その一つが瀬古の井戸である。深さ8 mの井戸を掘り伏流水を汲み上げ庄内用水に流した。井筒は直径8 m、高さ3 mの鉄筋コンクリート製。井筒が異常に高いのは、万一庄内川の堤防が決壊しても井戸が埋まらないようにするためという。資材不足のなか一粒でも多くの米を収穫するため、いかにこの井戸が重視されていたかをうかがわせる。
食糧事情の安定もありこの井戸も使われなくなったが、平成13年10月から黒川の維持用水として利用されるようになり、庄内川より取水できない時期に毎秒0.02㎥の清冽（せいれつ）な水を供給して、黒川の環境保全に役立っている。

建　設　昭和23年
所在地　名古屋市守山区瀬古二丁目
管理者　名古屋市
規　模　直径：8 m　井筒高さ：3 m　深さ：8 m